

へハ、唯正直を以てもととして祈禱を以てさきとす。御教を永く守る事穴賢。

文政三庚辰年

宮脇大神惟久

## 明治の佐伯三青年 (五)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

### 御手洗 一 而

(賛助会員・埼玉県川越市)

#### 林の上京

矢野が久作から一通の手紙を受けとったのは、晩秋の頃であった。手紙は大阪からであった。林が旧藩士といっしょに上京していることを知らせてあった。久作は安心して大阪に滞在し、林よりも一足早く手紙で知らせたのである。

矢野は秋の大試験に異例の進級をし、ほっとしながらも、向学の情熱はますます盛んであった。当時の塾の初

等教育は、リーダーの口授と文法書を教え、ついで地理又は窮理書(物理学)を読ませ、十カ月頃から歴史書、その後経済並びに文明の文献を講義することになっていったが、当初は英書の訳読が主体であった。矢野自身の「在塾当時の懐旧談」によると、

予が始めて入校せし時其後四五年の有様は、義塾教授の精神は只達者に訳読を教ゆるの一方針に止まりしが如し。或は餘科として時に数学又は発音を学ぶこともありたれども、算は附属の科業にて又永続せしものに

も非ざりき。要するに達者に英書を訳読するの一点張なりき。

とある。

その上、当時は西洋紙の値段が大へん高価で、初学者の読本は日本紙に印刷したものが多く、日本綴の小冊子に横文字を印刷したもので、不体裁のものであった。だから舶来の洋書を手挟みで講堂にでる学生は殆んどが上級生であり、下級生の羨望の的であつたらしい。矢野入塾時の教員は、藤野善蔵、浜野完四郎、荘田平五郎氏等で、時に中上川氏の顔も見えたが、藤野先生の受持ちが一番多く、先生の訳読は大へん巧みで、教え方も至って親切だつたと述懐している。

塾生時代の矢野は、ねむ気さましに熊の胆を口にし、そうまでして学業の遅滞を嘲けられるのを恥じるため、人に見られぬようそつとなめて苦心している。外出のとき、休日のときも、片時も一冊の英書を離さなかつた。この頃の矢野は全く英書にみ入られた塾生であつた。

休日にはよく家に帰つた。県令の父をもつ矢野にはもう一つの仕事があつた。父は葛飾県の庁舎にでむき留守

勝ちで、弟のこと一家のこと、まして今年八十三才になる祖父の容体が一番気掛りであつた。父に代つて長男としての責務もあつた。

そんなある日、上京した林は、旧藩主邸から一人で道を尋ね、旅装も解かず矢野邸の玄関先に立つた。

応対にでた書生の池田は、旅姿の少年を見て、げげんそんな顔をした。無理もない。林は当時十九才になつていたが、背が低く色白くあどけない顔立ちは、少年の顔であつた。池田はこの少年が矢野一家の郷里の者であることを知つて安心したが、県知事や矢野も不在で、その処遇にとまどつていた。その時、奥から現れた許嫁レツの顔を見て、林の顔がやつと微笑に變つた。

「レツ殿ではありませんか」

林はそれだけ言うのがやつとだつた。

それよりもレツの方が驚いた。矢野は家族の誰にも林の上京を知らせていなかったからである。旅装を解いた林にレツ、外から帰つた三弟の貞雄も加わつて、ひとしきり郷土の話に花が咲いた。

夕方矢野が塾から帰ると、一番先に林は玄関に飛び出した。

「矢野さん」

「おう、茂吉ついに来たか」

二人の両手は、がちりと結ばれた。それ以上の言葉はいらなかった。矢野は林の希望に満ちた眼の輝きを知り、林は矢野の充実した成長を一目で推測することができた。

その晩二人は、語り明かして一睡もしなかった。楠先生のこと、旧友の消息話のなかに、林の話は例の士族禁錮騒動につきるようだった。兵隊党の九人は、国事犯として日田県に護送されたが、一通りの審問の後、佐伯に帰されて禁錮中とのことであった。矢野は禁錮ですまされたことにほっとした。それから政体論に洋学と林の興味はつきなかつた。

翌日矢野は塾を休んで林につきあつた。林は長途の休息をかねて、暫くの間長屋に住み月を改めて入塾することにした。長屋の整理が終ると、矢野は書生達に林を紹介した。

「親友の林だ。今日は皆に漢学の先生を連れてきて

やつた」

矢野の紹介に、池田や田部の書生達よりも当の林の方がめんくらつた。書生達は、この青二才がと思つたにちがいないが、矢野には時折こんな茶目っ気があつた。林にとつては見知らぬ人達であつたが、矢野の弟や佐伯から昨年同道した郎党達を知つたのも心強かつた。矢野の本が幾冊か林の部屋に運ばれて、こうして林の東京生活第一歩が始まつた。

林は、読むべき本が沢山あるのが何よりも嬉しかつた。朝晩書生達と邸の掃除を手伝うぐらいで、他に用事もなかつた。暇があれば本を読み、矢野の使い古した教材や、始めてみる横文字を眺めていた。たいくつすると書生部屋に出掛けた。今日の林は、田部の読んでいる漢書を後から覗きながら、そつと声をかけた。

「一緒に読みましょうか」

池田も、もう一人の三上も、うさん臭そうに、又なにか起るのを期待するように林を見上げた。

「これは、矢野さんの本でしょう」

林は、田部の読んでいた本をとり上げた。一冊は、宋名臣言行録の後集であつた。林はなにげなく開けた頁を

読み出した。

公、成童より、凜然として成人のごとし、七才のとき、左氏春秋を講ずるを聞き、大いにこれを愛し、退きて家人のために講ず。すなわちその大義を了す。これより手、書き積すてず、飢渴寒暑を知らざるに至る。年十五にして、書、通ぜざるところなく、文詞醇深にして、西漢の風あり

読み上げるほどに、三人とも寄ってきた。司馬光の一章である。そして林は、「春秋左氏伝」から「史記」に至る註釈を加え、矢野さんが佐伯時代の愛読書であったことを話した。こゝまで読むと、池田が別の一冊をそと出した。林は見なれぬ表装に、一頁づつゆっくりとめくって見た。「孟子」であることはすぐ分ったが、誰かの写本であった。池田は、漢学についてかなりの素養もあったし、矢野についてもよく質問していたので、林の程度を知るために、いたずらと興味半分であった。林がしばらく沈黙していたので、それみたことかと思ったが、林はそうではなかった。「孟子欄外書」で読んだ楠先生

をふと思い出していたのである。

「誰の勉強した本ですか」

林は、その方が知りたかった。皆黙っていた。事実、誰も知らなかった。江村塾で矢野が学んだとき、会読に使った一冊が、この書生部屋に紛れこんでいたのである。

孟子曰く、ことごとく盡く書を信ぜば、即ち書無きに知かず。吾武成に於て、二三策を取るのみ。仁人は天下に敵無し。至仁を以て至不仁を伐つ、而るに何ぞ其の血の杵を流さんや。

「尽心章句下」の中の三章である。

林は、読み終ると、大きな眼玉でぎょろりと皆を見廻した。

「この意味はなあ。文章を読めても、文字ばかりにこだわると、中味の意味・精神がおろそかになることを誠めているんだ」

と、かいつまんで要約しながら、次の頁に眼を移していた。池田や他の書生達は、林の実力を認めてちいさくなっていた。

「誰が読んだのかなあ。武雄さんかもしれない」

林は、一人言のようにつぶやいた。武雄とは、矢野の次弟で、藩の眞進生として大学南校に通っていることは前に書いた。

こんなことがあってから、一見高慢に見える林ではあったが、書生達もその学識は認めざるを得なかった。

「流石に矢野さんの親友だけのことはある」と、変なほめ方もするようになった。

林は日一日と東京生活になれてきた。散歩かたがた町を出歩くことも試みた。東京の町を歩きながら、維新の变革が大へんなものであったという認識も肌で知ることができた。明治四年といえば、東京市中は、一応の治安は保たれながらも、空家はあり、庭は草の生え放題、道路にまで雑草のはびこる状態であった。反面、一步矢野邸に入ると、県知事の職がいかに威厳のある権力をもつ要職であるかもわかってきた。そこには安堵感もあったが、町のうわさ、書生達の話を総合しても、太政官の布告が、そのまゝ生活に影響するのが不思議でならなかった。佐伯と東京では、すべてに於てかなりの距離がある

と思ひ始めた。「上京してよかった」、これ以上の感慨は何もなかった。そして、矢野からは、ことごとく西欧の眞似事を勉強することに終始すると眼を開かされた。久作からの手紙にみる郵便制度、治安の邏卒制度、鉄道の新設、すべてが西洋文明であることを知らされた。そのためにも洋学を学ばねばならないと痛感した。矢野の口からは、もはや「一里に届く大砲」と「大汽船」の話は聞かれなくなっていた。子供時代の夢が、東京ではすでに現実として過去に押しやられていた。林の眼にも驚くべき早さでその変化が映っていた。

#### 祖父多門の死

月が代って十一月の三日に、林は慶応義塾に入塾した。そして入門帳に次のように書いた。

府藩県 佐伯県 豊後

身分 平民

宿所 三田二丁目六番地

父兄ノ姓名 林平四郎

年令 十九才

社中ニ入タル月日 十一月三日

入社證人ノ姓名 佐伯県大属 関谷侃

待望の義塾に入塾して、周囲の秀才顔を見廻すと、田舎出の林は気おくれしなくてもなかつたが、天性の負けん気がむらむらと湧き立った。矢野が、早速保証人でもあり先生でもある莊田先生に引き合わせてくれたのも嬉しかった。その上、莊田先生が郷里の隣藩である臼杵藩の出身であり、激励されたのも感激であつた。林は、これでいよいよ天下の塾生になつたと身構えながら、十二等からの始まりであつた。

矢野の言つた通り、同等の漢学の素養については、ひけはとらないことを確認した林は、英学習得の出発に關して、漢学を一切忘れることにした。最初の横文字にはとまどつたが、苦学書生の林にとっては、勉学こそ現在の生甲斐であり、意気込みが他の塾生とちがつていた。まして、矢野先輩の助言は、師に勝るものであつた。

十五日のことである。矢野は食堂で林を探していた。新入生らしくすみっこに席をとつていた茂吉を見つけて、「おい茂吉。おれは一寸家に帰ってくる」

ときり出されて、林は多門翁のことかと心配したが、

そうではなかつた。

「今池田から連絡があつた。父が今度深津県令に転任になるらしい。なんでも県の統合が行われたらしい」  
「そうか、父君も又忙がしくなるなあ」

林は、矢野の説明を聞いて納得した。

矢野は塾監に許可を得て、急いで帰宅した。家には、旧藩主邸からの使と、父からの使の者が寄つていた。

深津県とは、現岡山県内で、当初おいた倉敷県に鴨方・岡田・足守・庭瀬・新見・浅尾・生坂・高梁・成羽・福山の各小藩を統合したもので、のち、小田県となり、明治八年に岡山県となる。

塾の寄宿生活を送つていた矢野にとって、というよりも、英学のため雑念を捨てた矢野には、十三・四・五日と行なわれた府県の廢合は初耳であつた。備前に岡山と深津県をおくことを知つたが、佐伯県が廢されて大分県に統合されたことは、矢野にとっていささか妙な氣持ちであつた。この廢合は、二十二日で完了し、三府七十二県の郡県の制定が定められている。

翌日、矢野はこの事を林に話した。

「そうですか。佐伯の名もなくなるのですか」

林は、郷里を偲んで淋しそうだったが、「小藩はしかたがないよ」と、結んでいた。

矢野や林の身边には、こうした政治の改変が自然に父を通して耳に入ってくる。そして、先月欧米に渡った岩倉使節団のことに話が移っていた。

矢野が言う。

「もともと国と国との間は、万国公法に照らして平等でなければならぬ。それを不平等の開国をせまられたのが発端だ。それには万国に認められる独立国の体裁を整えねばならない。そのためにも外国の法律・制度・理財・交際を研究して日本に適合するものを探さねばならない。使節派遣の目的もそこにある。なにしろ徳川の鎖国は国中を盲にしまったからなあ」

林はうなづいて聞いていたが、疑問もあった。

「矢野さん。この前こんな分厚い洋書を読んだ。英語がびっしりつまっていたが、あんな本を読んで、果して今度の使節が何人理解出来るのでしょうか。しゃべるのも不自由で対等の話が出来るとはどうか」

林は、こんなと洋書の厚みを指で示しながら、不安な

様子であった。

「茂吉、そう馬鹿にするな。福沢先生だって文久以来二度も洋行されている。西洋事情だって、あれらの翻訳ではないか」

「それもそうだな」

林は、半分そう思い、半分は信じないでいた。じじつ、木戸、大久保、伊藤、山口等の各副使は、専門分野についてかなりの苦労をしている。その上、東洋の弱小国として、まともに相手にされなかった。

「だからこそ、秋月先生のいう青年の学問がある。いまにすぐ読めるようになる。いや、どうしてもやらなければならぬんだ。努力あるのみだ」

矢野のいう通りだった。林はそのため塾生になったと改めて思った。それから矢野はこんなことも話した。

「維新のリーダーは、薩長の力にあずかるところが大きいが、やがて日本国中の叡智を必要とする時がくる。幕末の志士に代る世代が、今からの新知識を得た青年達によって代る。いわば、新国家建設の志士がわれわれの任務である。西欧の書物の中にその宝物が埋もれているんだ。宝探しを急がねばならぬが、そのために

も英書を理解せねばならぬ」

矢野は、秋月先生にさとされた「薩長の国ではない、日本の国である」という話もつけ加えた。林は、その間黙って聞いていた。先輩が英学のみを心掛け、雑念をとり除こうとしている意味もわかるような気がした。

矢野の父光儀が新しく任命された深津県に赴任する日、林は意外な人に会った。

「やあ、茂吉ではないか」  
従兄の山口であった。

林もこんなに早く会えるとは思っていなかった。山口も県令と一緒に深津に下る途中であった。三年振りのことである。

「なつかしいなあ。こんなに早く会えるとは思わなかった。佐伯の人は皆元気でやっております」

それから林は、矢野さんのおかげで義塾に入塾の近況を話した。

「そうか。天下に名だたる慶応義塾の塾生か。大したものだ。それにしてもよく上京したなあ」

山口には、林の経済状態の不安がないでもなかった。

家庭の事情をよく知っているからである。しかし、上京しだての林は、この頃当座の費用には困っていないなかった。

光儀は文雄に、祖父多門翁の容態を気づかいながら赴任したが、高令の多門翁の天寿はそれから永くは続かなかった。暮れもつまった十二月十三日、遂に不帰の客となった。予期していた天命ではあったが、矢野にとって、淋しさはやはり隠せなかった。厳格な祖父ではあったが、子供の頃からの訓育は並大抵ではなかった。矢野の儒教的素養と政治性は、多門の執念ともとれる所産であった。多門が江戸詰の時代、碩学の塩谷右陰、剣術の長沼笑兵衛と交際したように、矢野の文武は、祖父の血をうけた伝統的なものである。父光儀が、時代はちがっていても、洋書の良い訳書を常に手離さなかったのと対象的である。門閥でなかった多門が藩の為政者としていられなかった志を、孫の文雄に期待し、矢野は将来為政者たるべく育てられたのである。矢野の母コマが、国家老佐久間儀右衛門の娘であることも、政略的な多門祖父の意図が察せられる。多門は、子供の文雄に、「お前は左の額に七つの黒子がある。これは七星の象で、経世済民の使命を受けているのである。必ず政治家となって、この使命を果



たせよ」と、中国の故事にならって教えている。矢野が晩年になって、「大隈侯昔日譚」の中に、大隈さんと福沢先生の他に、どうしても忘れることが出来ない一人として、この祖父多門のことをあげている。矢野の人生に、祖父の感化が非常に大きく、善であれ悪であれ、少年時代の訓育ほど、印象の深い力強いものはないと語っている。

父が任地におもむき、祖父のいない矢野邸は、ぼっかり穴のあいた空洞のような沈んだ重苦しい毎日が続いた。明けた明治五年の正月を祖父の喪に服した矢野は、学業に戻ったが、父君留守中の主人として雑用も多くなった。「慶応義塾学業勤惰表」によると、その頃の矢野は、やはり少しばかり欠席が普段より目立っている。春になると、春秋二回の大試験が行なわれる。明治四年は、矢野にとっても林にとっても、人生の出発点ともなるべき忘れられない年であったが、特に祖父の死にあった矢野は、この春の大試験を前にして、やっと雑用から遠ざかることができた。一方林は、上京の意気込みをそのままに学業にうちこんでいる。前記の勤惰表によっても殆んど無

欠席に近く大試験を迎えている。

その結果、矢野は八等から七等になり、林は、十二等から一挙十等に昇級している。

しかし、林が入塾して三ヶ月も経つ頃から、矢野には一つの苦痛と不安がつきまとい始めた。若い林をかばいながらも、父の仕送りだけで二人分をまかなう冒険に、予期しない誤算があった。矢野は大試験が終って一息つくくと、生活環境を変えるために、うち明けて、このことを林に話した。林に反対する理由もなく、いよいよこれから二人の苦学生生活が始まることになる。(つづく)

### 受贈図書紹介

由布院のキリシタン史(一四一頁) 阿武 豊著

上浦町津井 山本正直氏より

庄屋日記(天保十二年) 延岡市三須町の庄屋

日記の古文書のコピー 延岡市 玉木恒雄氏より

歴史手帳

東京 名著出版 より

四月号特集(沖縄の歴史とグスク)

五月号特集(北武蔵の古墳)